京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成24年10月24日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　文学研究科
職 名・学 年　博士課程3年
氏　　名　太 田 純 貴

助成の種類	**平成23年度　・　若手研究者在外研究支援　・　在外研究長期助成**	
研究課題名	メディアアートにおける「触覚」概念の研究	
受入機関	カリフォルニア大学ロサンジェルス校　デザイン|メディアアーツ学部 （アメリカ合衆国）	
渡航期間	平成23年　9月11日　～　平成24年10月11日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　■ 無　□ 有(　　)	
会計報告	交付を受けた助成金額	2,500,000円
	使用した助成金額	2,500,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	渡航費用（往復航空券等）　150,000円
		査証発行料・手数料等　50,000円
		滞在費　2,300,000円
当財団の助成について	（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。） 一括で振り込んでいただいたこと、柔軟な使用が認められていることなど、研究に従事する側としては大変使用しやすい助成金であり、かつ研究生活をサポートしていただける助成でした。 成果報告に関しては、アメリカに滞在中に論文などを執筆したため、そちらで代用できるようになりますと、個人的には非常にありがたく思います。	

京都大学教育研究振興財団助成　報告書

研究題目：メディアアートにおける触覚概念
期間：2011 年 9 月～2012 年 9 月
場所：アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス
受入先：カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）デザイン｜メディアアーツ学部
受入教官：Erkki Huhtamo

本報告書は、京都大学教育研究振興財団により長期在外研究助成を受け、1 年間の UCLA での研究成果について報告するものである。採択者は、メディアアート研究の第一人者であり、メディア考古学という学問領域／手法のパイオニアでもある Erkki Huhtamo（エルキ・フータモ）教授のもと、UCLA Design|Media Arts 学部（以下 DMA）にて在外研究を行った。その研究成果は①理論的②実践的（フィールドワーク）③（若手）アーティストたちとの交流の三点に大別できる。

①理論的成果

理論的研究成果としては二点挙げることができる。一点はフータモ教授の大学院生用のレクチャーに定期的な参加によって得られた成果であり、もう一点はそれらをもとにしつつ、採択者自身による英語での論文作成（二本）とフータモ教授へのインタヴューである。

フータモ教授による院生用のレクチャーでは、フータモ教授によって指定されたメディアアート関連の文献を各大学院生が読解し、それをもとにレクチャーとディスカッションが行われる、という形式であった。日本では入手困難なメディアアートを様々に論じるため視点を提供する文献も選ばれていること、またフータモ教授自身による各文献の相互関係や、メディアアートに関する歴史的研究の新たな糸口となり得るような視点が常に提示されていた。採択者は、他の院生同様に文献読解を担当し議論に積極的に関与することで、メディアアートを多角的に論じるための視点や文献を獲得・収集した。これらは帰国の後、再度読解を施すことで、自身のメディアアートについての議論を補強してくれよう。

上記で得られた知見を参照しつつ、採択者はメディアアートに関連する日本の論文を英語により作成した。一つはメディアアートの最大の源流の一つとされるヴィデオアートに関係するものである。採択者は UCLA 及び、Getty Research Institute での調査も行い、日本とアメリカのヴィデオアート／アーティストーメディアアートの草分けとも呼ばれるアーティストを含む一の影響関係、それと深く連関する 60 年代から 80 年代前半までの日本におけるヴィデオアートの展開についての論文を作成した。本論文は the Journal of Asian Arts and Aesthetics (Vol.5, 2012) (Jale Erzen 編)に採録が決定している。

もう一本の論文は、メディアアートの触覚論に深く関わる採択者自身の論文の英訳である。本論文はメディアアートにおけるhaptic概念を問うとき、その理論的基礎をなすものと思われる。採択者は、日本語以外の読者にもそのアクチュアリティを示し、この概念を用いたメディアアート議論

のための土台作りとするため、該当論文の英訳を実行した。校正は院生のDennis Rosenfeldの助けを借り、英訳された論文は国際版『美学』に投稿し、2012年10月現在査読中である。

ところで申請者は、メディアアートと強い連関を持つトピックであるタイムマシン（TM）／タイムトラヴェル（TT）についても研究をすすめている。2012年10月には京都大学で開催された美学会全国大会において、「タイムマシンの美学」と題されたセッションが開催された。このセッションに際し、採択者は京都大学の指導教官である吉岡洋教授の要請を受け、UCLAでの指導教官であるフータモ教授にタイムマシンに関わるいくつかのトピックに関してインタヴューを行い（都合により太田の発言部分は映像には含まれていない）、そのインタヴューを録画したものがセッション中に配信された。

②実践的成果

在外研究中、フータモ教授や院生たちとともにアートとテクノロジー、メディアアート関連の美術館やその収蔵作品、イベント、プロジェクトなどの見学を行った。代表的なものとしては、Beall Art Center（カリフォルニア大学アーヴァイン校） (Golan Levin Exhibition), The Bermant Foundation of Kinetic Art（サンタ・イネス）、フランク・ロイド・ライトによる Taliesin West やパオロ・ソレリの Arcosanti（ともにアリゾナ）などである。各調査においては、貴重なアーカイヴ（ex. Arcosanti）閲覧や、学芸員やアーティスト（ex. ゴラン・レヴィン）との質疑などを行った。

また、採択者単独でもロサンゼルスのみならず、サンフランシスコやニューヨークでのメディアアート関連の美術館やギャラリーの調査に取り組み、メディアアートの歴史や最先端の動向を整理し、把握することができた。

③若手アーティストとの交流

DMA は世界各国から若手のメディアアーティストが集まる国際的な学部として知られており、そのなかにはコンピュータアートやメディアアートの最大の祭典の一つである SIGGRAPH などへの出展経験者も存在する。採択者は彼らの制作風景を間近で見学し、そのコンセプトなどを直接に知る機会に恵まれた。

こうした若手アーティストへのインタヴューや制作活動の見学を通し、採択者は彼らとの信頼関係を築き上げた。採択者のこれまでの研究は理論的側面を中心としており、実際の作品や（特に若手の）メディアアーティストに関しては、目配りが行き届いていなかった部分が有ったが、今回の在外研究中の若手メディアアーティストたちとの交流・ネットワーク形成により、そうした側面が強化されることは間違いない。さらに採択者は若手アーティストたちから、彼らの作品についての多くの資料を提供していただいた。それに基づき、採択者は批評等を行い、彼らの活動を理論的にサポートする予定である。つまり、採択者は、頭角を現しつつ有るが日本ではまだ知られていない彼らの活動を日本のメディアアートシーンへと紹介していくことができると思われる。